



劇的舞踊『ラ・バヤデール-幻の国』 Photo by Kishin Shinoyama

【批評】

言葉を使うことで危険な領域に踏み込んだ 劇的舞踊第3作『ラ・バヤデール-幻の国』

舞台の床に照明を当てて、中央に本舞台、両サイドに花道風の出入りスペースを設定した空間がひろがる。中央に能の道具を思わせる何本かの木材が立つ。老人ムラカミ(貴島豪)が登場して、マランシュ国の偽りの発展とあとという間の滅亡の過程を語りはじめる。Noismの劇的舞踊第三作『ラ・バヤデール-幻の国』は、能と似た作りのオープニング・シーンを用意していた。

バレエ『バヤデルカ』はプティバの振付、ミンクスの音楽により1877年、サンクトペテルブルクのポリショイ劇場で初演された。これは舞台が古代インドだった。それを平田オリザが架空の帝国の盛衰史として書き改めたのが『ラ・バヤデール-幻の国』だ。言葉を使ってストーリーを進め、その中に踊りの見せ場、音楽の聞かせどころを作るというやり方は、日本古来の能や歌舞伎などの手法をそっくり踏襲したものと言ってよい。

ヨーロッパで発展したバレエは、言葉を使わないことを原則としているために、歴史をこと細かに語るといったことには不向きだ。バレエ作品が社会の矛盾を鋭く衝くといったことは行われてこなかった。ルイ14世の力で発展したバレエの本拠地であるパリ・オペラ座が、1789年のフランス革命の後も存続できたこと、アンナ女帝の肝いりで始まったロシアのバレエが、1917年に始まった革命の後も変わることなく上演さ

れ続けてきたことなどは、バレエが言葉を使わなかったからだったと言える。

日本でも同様のことがあった。日本が戦争を始めて世界各地へ攻め入った頃、舞踊家たちは軍の慰問にかりだされ、兵隊たちの前で舞踊を披露し、戦意を高揚した。その渦中、日本に帰化して霧島エリ子を名乗ったエリアナ・バヴロバは、1941年に慰問先の中国で病死している。しかし1945年の敗戦後、日本の舞踊家たちは占領軍であるアメリカの兵隊たちの前で踊りを見せるという変わり身の早さを示した。それも言葉を使わなかったからできたことだ。しかしNoismは今回、バレエの中に言葉を使うことで、身分格差、信仰、危険薬物といった、もろもろの問題に関わり、自らの立場を明らかにすることを選んだ。

ミラン(ニキヤ・井関佐和子)は、カリオン族の踊り子だ。メンガイ族の騎兵隊長バートル(ソロル・中川賢)と愛し合う仲だ。しかしマランシュ族の皇帝は、娘フィシェン(ガムザッティ・たきいみき)の婿にバートルを指名する。ミランに秘かに想いを寄せる大僧正ガルシン(奥野晃士)がからんでくる。平田の脚本は、ミンクスの間に笠松泰洋の作曲をうまく配置した音楽をバックに、プティバの『バヤデルカ』の人間関係をそっくりそのまま再現していた。

言葉によって状況を、このようにはっきりと示されると、新興国家マランシュの国益優先に蹂躪される

ミラン(ニキヤ)とバートル(ソロル)の姿がよりいっそう鮮明に、残酷に見えてくる。バートルとフィシェンの婚約式の場で踊ることを強いられ死を選ぶミラン、麻薬に身を持ち崩して行くバートルの背後に、身分格差がそびえ立っている。

また国が減びて行く過程で麻薬の果たした役割などについても、その非人間的な意図が観客に正面から突きつけられる。プティバの『バヤデルカ』の幻影シーンも阿片を吸った男の見る夢であることに変わりはない。しかしプティバの創ったバレエでは美しさを強調して、その背後にあるものを見えなくしている。Noismの『ラ・バヤデール-幻の国』では、ダンサーの動きを新たに、麻薬による幻覚の中のいかにも頼りなげな浮遊感のようなものを表現し、これを最大の見せ場に創り上げた。役者たちの演ずる厳しい状況描写の間に、ダンサーたちの踊りを収めて、このの成り行きをより明らかにしているのだ。井関佐和子、中川賢らのダンス、たきいみき、奥野晃士、貴島豪らの芝居がみごとに噛み合った舞台からは、プティバのバレエでは感じられなかった非人間的な現実の厳しさがひしひしと迫ってきた。

(2016年7月2日／KAAT神奈川芸術劇場)

〈幻の国〉とはどこだったのか

バートルは期待したに違いない。ヴェールをめくれば自分との逢瀬で見せたミランの、花が綻ぶような微笑がそこにあると。だが在ったのはひらひらとした白い闇。例えばキュビズムの絵画が、複数の視点からの対象物をキャンバスに落とし込むかのように、ゆらめく布のレイヤーの狭間に影の断片は立ち上がっていた。

合わせ鏡のような無限回廊の幻影は、この上もなく美しく異界とこちらとを往還する。しかし記憶と願い、自責が描きだした幻は霧散する。

事ここに至ったのはひとえに、迫られた選択肢のいずれを为主体的には選べず、また選択を強いた関係性の外部を想像しえなかったバートルの弱さにある。弱さ? いやむしろ共同体の中で生きざるをえない人間の本質的な有り様と言えよう。

バートルを苦悩へ、ミランを死へと追いやったやわらかな圧力=権力構造の頂点に位置したのは皇帝ブージュであった。皇帝に密告される事ども、皇帝の意を汲むフィシェン、暗躍するボーヤン……。だがしかし、皇帝もまた共同体の中で皇帝として遇されていたがゆえに、皇帝であったにすぎないのではなかったか。つまり〈幻の国〉とは、そこを国として成立せしめたかった人々によって国の体を成した共同体なのではないか、と。

瓦解は突然だった。かつて美しく槍を扱った帝国陸軍を擁した〈幻の国〉は、航空機を持った外敵の前にあつてなく滅びる。恐らく何が起きたかすら理解できないうちに。圧倒的なテクノロジーの格差とともにそこに存在したのは、破壊をもたらす厳然たる他者であった。

さまざまな民族が彩った場所を無化するかのような白々とした空間を前に、我々は国の散逸を知る。最早、かつて〈幻の国〉がそこに存在した記憶を語るムラカミの姿から、度し難い関係性の中において立ち現れた国のかたちに思いを馳せるのみである。

ときに、劇場から一步外へ踏み出した我々の目に〈この国〉はどのように映ってゆくだろうか。

横坂美喜 (長岡市在住)

向き合うかたち

老人・ムラカミの記憶に呼びおこされ、四方から走り出る人々。青・赤・黄・紫・銀…その衣装の色は深く愛いを帯びつつ艶やかで、観客の目を奪う。『ラ・バヤデール-幻の国』は、幕開きから、美しい「幻」としてうかびあがる。

暗示された悲劇的な結末をまだ知らない恋人たちの踊りは優しく温かい。井関さんのミランが中川さんのバートルに頭から抱きつく姿は(そうとしか文章化できないのが悔しいが、舞台を見た人にはわかってもらえるはず)、無類のかわいらしさ。横に並び、深く息をすって、はく。それだけの動きが、二人の幸福感と繋りを強く感じさせ、ほほえましくも、切ない。

二部では、ミランはすでにこの世の人ではない。冷たく灰白い幻影たちは、奥から手前へ、左右へと、伸縮を反復し、バートルと観客の目を惑わせ、眩ませる。ようやく出会えても、近く近くに寄り添いながら、触れあえない二人。残されたうつつせみの衣もまた、抱けずすぐに消えるのだろう。

ダンスや演劇はすぐに消えてしまうもの。それはわかりきっているのだが、この舞台が消えてゆくことがどうにも悲しくて、見終わるごとに、もう一度、もう一度、と思いが募った。新潟、神奈川、静岡、鳥取へと旅を続けてもなお、兵庫と愛知にも行けばよかったと未練を断ち切れず。『幻』にとり憑かれると、こうも強欲になるものなのか。

『バヤデール』では、登場人物たちが様々なかたちで向き合っていた。体と体で。言葉と言葉で。そして、言葉と体で。SPACの俳優3名は言葉を発し、Noismのダンサーは体で発信し、答える。その応酬はバランスよく、違和感も覚えなかったが、本来不自然なことを自然に受けとめさせるための作業には、困難もあったと思う。同じ「劇的舞踊」でも、「劇」と「舞踊」のあり方は三作全てで異なっていた。次は、どんな世界へ連れて行ってくれるのだろう。

安藤貴映子 (東京都在住)

白い幻の国

最近まで、ダンスと言えばクラシックバレエ一辺倒だった私にとってカルメンに続き二作目の劇的舞踊『ラ・バヤデール』。期待を裏切らない舞台でした。平田オリザさんの脚本、ダンサー、俳優陣はもちろんのこと舞台美術、衣裳の見事さ! 以前テレビでISSEY MIYAKEのドキュメンタリーを見ていたら、製品をまとってダンスしている井関さん達を発見。存在感さすがですね。

この演目では多彩な色違いで部族やシーンを象徴していましたが、やはり今回は「白」。白い幻の国…バートルが造り出した純粋な美しい国に、今までのクラシックバレエ(白いバレエ)に見られる様式美が溢れていました。本家のラ・バヤデール、ジゼル二幕ヴィリ達、白鳥の湖を思わせる群舞。オデットを探す王子の様にヴェールをめくっていく場面、ヴィリ達の様に男を苛む乙女達…

今までに何回となく観た場面を思い起こしても、今回の白の場面は最高でした。前からファンの方の中には、クラシックバレエっぽくなってちょっと…と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが。私は、ある意味クラックを踏襲しながらもNoism作品として創りかえに成功した例だと思えます。

権力者が造り出したのではない幻の白い国、それを表現するには様式美が不可欠、というか最適ではないかと思えます。現代に残っているクラシック作品は音楽や美術などすべてに普遍的なものを持っていますから。

天から降りそそぐ白いけしの花びら(これの力を借りなければ幻が見れない)の見事さ。衣裳が花びらとなりはらりと散る場面には息をのみました。

他のシーンでは、壺を奪い合うラグビーの様なコミカルな踊り、異彩を放つボーヤン役石原さんが印象に残りました。劇的舞踊ということで、セリフのある役を素晴らしい俳優陣が務めています。皆さんが演じるのは権力者、声の大きな人間ですね。言語を巧みに操る者は、音声やネットを含めた活字を用いて世の中を支配します。

声の大きな者に流れれぬよう、原始的な感覚(五感と第六感)と身体を鍛えて乗り切らねば、などと思いながら帰りました。

中山幸子 (阿賀野市在住)

回想されざるもの

～ 劇的舞踊vol.3『ラ・バヤデール-幻の国』

緞帳があがると、目に入るのは鈍い銀色の慰霊碑。杖を片手によるよると周囲を回り、力なく見上げる老人は「ムラカミ」という名前をまだ持たない。彼が「前を向こう」「必ず思いは通じる」「一人じゃない、仲間がいる」…そんなメッセージが込められていると感じた。中学校は3校のみの上演だったと聞いた。私個人的には、この作品をもっとたくさんの中学生…いや、小学生にも…観てもらい、「火の鳥」から発せられるメッセージを受け止めてほしいと強く思った。

ムラカミの回想。私たちは容易く信をおくが、「時代」の理解は焦点を結ばない。メンガイ族の騎兵隊長バートルの端正な槍さばきや、傀儡皇帝のもと、宮内義之の衣裳が描き分ける五族が、田根剛による斜めに振られた白く四角い世界で一堂に会する場面の色の洪水に陶然としたはずが、すぐに馬賊の頭目の手に銃を目撃し、最終盤では滑稽なまでの戦力の不均衡も露わに、「空爆」や「戦車」という語を耳にするがどうですらある。

だが、冒頭まもなく、ひとり「橋懸かり」を辿らず、世界を横切ってしまう亡霊の姿が、回想の枠組みを既に美しく破綻させていたのではなかったか。愛するミランを失い、「癒(いん)」に墮したバートルが踏み込む「影の王国」に至り、群舞やバード・ドゥッが示すこの世ならざる美しさは、私たちから言葉を奪い去ってしまうだろう。戦慄にも似た圧倒的な視覚体験に息もつけない。加えて、結婚式。皇帝の傍ら、白い照明を浴びつつ、両手で目を覆い、見ることを拒絶して立つ亡霊の姿の強靱さも目を惹く。彼女の拒絶が帝国を崩壊させたかのようにすらある。しかし、それらは全てムラカミの回想の外部であるはずなのだ。

そうなのだ。取り違えていたのだ。ムラカミは饒舌な傀儡に過ぎず、回想の真の主体は、無言の慰霊碑だったのだ。ムラカミが消えたあとも、それは舞台上に留まり、真上からの照明を浴びているのではないか。周囲は肌色の無個性

な衣裳を纏って歩む者たちには見覚えがある気もするが、間違いかもしれない。歩調を速めたかと思うと、やがてピタリ瞬間凝固して幕。この舞台に心震わせた者には耽溺が待ち受けており、自らのなかに「癒」に墮したバートルを見出さずにはいられまい。

下村 伸 (新潟市在住)

「分からず屋でごめんなさい」

非難ごうどう、袋叩きにあうのを覚悟で言うと、「ちょっとがっかり」。バヤデール新潟公演初日を観た直後の感想です。もっとドロドロの悲劇、悲惨な物語を想像していました。洗練された気高い美しさは非の打ちどころがなく、目はぐき付けになるのですが、主要な役以外のNoism1メンバーの見せ場が少な過ぎたのが残念。Noism1の踊りをもっと観たかったです。でもそれはバヤデールがもともと優美な音楽の古典バレエであり、脚本もある作品なのだから仕方ないですよね。そう感じるのは私がバレエに関して知識と親しみがないからなのです。最大の見せ場である第2幕の白い亡霊の踊りさえ長く少し退屈に感じてしまったくらいなので。観る目があるバレエ好きの友人たちは称賛していました。2日目、これは時空を超えた近未来SF(じゃないけど)ファンタジーなのだ、と想像したら少し楽しくなってきました。3日目、なぜか無性にフィシェンの声とセリフが聴きたくなり足を運びました。「社会的問題提起」も今までで最も解りやすい形だったと思います。今のNoismの目指すものとは違うのかもかもしれませんが、解りにくいかもしれないけれど心に刺さってきた。「劇的」ではない舞踊も観てみたくなったこの頃です。でも、何でも観に行きますよ、Noismの舞台なら。これからもずっと愛を持って。

磯部直子 (新潟市在住)

発せられるメッセージ

～ Noism2定期公演

女性8人の新生Noism2。2016年の定期公演では『火の鳥』を再演で観ることができた。Noismの舞台をじっくり観ようになって3シーズン目。もっと早くから観ておきたかったと思う。その願いが「再演」という形で叶い、観られたことがとても嬉しい。

『火の鳥』[ÉTUDE]ともに、演目から発せられる「メッセージ」がひしひしと伝わってきた。『火の鳥』は市内中学校の学校訪問で上演されていて、ダンサーの動きや表情からストーリーがつかみやすかった。私は「前を向こう」「必ず思いは通じる」「一人じゃない、仲間がいる」…そんなメッセージが込められていると感じた。中学校は3校のみの上演だったと聞いた。私個人的には、この作品をもっとたくさんの中学生…いや、小学生にも…観てもらい、「火の鳥」から発せられるメッセージを受け止めてほしいと強く思った。

『火の鳥』が外に向けたメッセージと捉えるならば、[ÉTUDE]は8人のダンサー自身に向けられたメッセージではないかと感じた。力強く心地よいピアノの音色・旋律・リズムを、身体をうまく使って表現する前半は、「そこに音楽(曲)があり、それを表現する」ことに向き合い、試行錯誤する8人の姿がある。リングに象徴される「何か」を見つけた後、音楽が止む後半は、無音あるいは足踏みの拍の中で動き、静止して身体と向き合い、表現の可能性を探る姿が表れていると感じた。ラストは、彼女らがこれから向かう道、可能性、さらにはこれから背負うであろう苦悩や課題を見出して、決意をもって一歩踏み出そうとする思いが伝わってきた。背後に再び流れる曲が、8人を後押ししているかのようだった。アフタートークで山田勇気さんが「[ÉTUDE]の演目を、踊り手がどうつくっていくか」とおっしゃっていた。願いが叶うならば一年後にまたこの8人の[ÉTUDE]を観てみたい。観る側も何かまた、新たな思いや気付きがありそうな気がしてならないから。

竹内知佳 (新潟市在住)